「 **“慈しみを巡って”**ポーランド・スロヴァキア・ハンガリーへの巡礼 」報告記

神山道子

期間；平成 29 年 8 月 21 日(月)～8 月 31 日(木)

企画・団長；パウロ・ヤノチンスキ神父(ポーランド出身、ドミニコ会)　参加者；22 名

現地ガイド；バルバラさん、ヒロミ・リヒテル(藤田)さん(ポーランド)、

エリナさん(ハンガリー)

今年の春ごろの事であったか、カトリック百合ヶ丘教会の信徒であるドロタ・ハワサさんから東欧 3 カ国(ポーランド・スロヴァキア・ハンガリー)巡礼の案内を頂いた。彼女とはキリシタン史研究の関係で親しくなり、いつかポーランドを訪ねてみたいという気持ちを話した事があった。ドロタさんは本年母国ポーランドに於いて、日本のキリシタンについて、特に高山右近を中心にした内容の本を、同国のイエズス会の神父と共著で出版されたという、真に日本のキリシタン史に造詣の深い人である。5 月には韓国巡検も決まっており、8 月実施というその巡礼に参加する事には些か躊躇もあったが、子供の頃から東欧諸国には漠然とした憧れのようなものがあり、少し歳を重ねてから知った東欧の痛ましい歴史が心にかかってもいた。特にポーランドと言えば、まずユダヤ人迫害の最たるものである、アウシュヴィッツ強制収容所を思い浮かべるのは私に限らないだろう。それに第二次大戦中の「カチンの森事件」、「ワルソーの蜂起」と言った悲劇的な事件。さらに今回訪れた 3 か国とも戦時中ナチスに支配され蹂躙された挙句、戦後長くカトリック国でありながら、ソ連の共産主義政権下におかれた国でもある。特にポーランドは厳しい状況の中で信仰を守り、ヨハネ・パウロ 2 世という偉大な教皇も生み出している。頬に傷のある黒い聖母像で世界的に有名なチェンストホーヴァという巡礼地も有している。その信仰の深さは何故なのか、どこからくるものかという興味もずっと抱えていたのである。それはキリシタン史を研究していて、自身にとっていつも突き当たるのが信仰の問題だからでもある。自分には決して耐えられそうにない拷問や恐怖・飢餓に耐え、殉教に至る信仰の深さは未だに想像を超えるものである。潜伏キリシタンをルーツに持ち、ほんの数代前の先祖が「浦上四番崩れ」により流罪の身となり命を落とした事を伝え聞いても、その信仰心の強さが自分の血の中に伝わっているとは到底思えない。「信仰とは何か」という大げさな事でなくとも、何故そこまで無心に信じられるのかという事が常に心にかかっている。そのような次第で迷いつつも東欧巡礼に申し込んでみたところ、俄かに何が何でも行きたいという思いが強まり、それからは少しずつ予備知識を得る事にも努めた。出発の日も次第に近づき、心も頭も東欧への思いでいっぱいになってきた頃、不思議なほどその旅に関連するような事柄が続いたのである。ある目的で父方の伯父についての資料を読んでいたところ、昭和 14 年、日中戦争の折り軍医として北支に従軍した伯父は、その地域に残って医療や難民の世話をしていたポーランドのフランシスコ会の存在を知り、彼らが世話をしていた各教会に不足

していた医薬品を届けた事が記されていたのである。伯父の行為も立派だと思うが、当時他のカトリックやプロテスタントの宣教師がその地を引き払って出ていった中で、危険を顧みず踏みとどまって活動したという、ポーランドの宣教師の行為も素晴らしいと思った。この伯父はこの後、被爆直後の長崎に九州大学より放射線科の専門医として、住民の検診調査の為に派遣されたが、当時の同僚の話では、毎日のように聖母の騎士の教会のミサに通っていたとの事である。聖母の騎士は知られているようにポーランド出身でコンベンツァル・フランシスコ会のマキシミリアノ・マリア・コルベ神父によって創設された修道会である。神父は戦前日本の長崎に赴任し、6 年間「聖母の騎士」誌を発行するなどして布教活動を行っている。1941 年アウシュヴィッツ収容所で他人の身代わりとなり餓死刑を宣告され亡くなり、1982 年列聖されている。小崎登明著『身代わりの愛』(聖母の騎士社　1994 年)によれば、神父の崇高な死が、長崎の聖母の騎士修道会に届いたのは、大戦翌年の 1946 年の事という。同年、本国からさらに神父の死の詳しい経緯が記載された「聖母の騎士」誌が届き、その内容が同年の 12 月号から再刊されたばかりの「聖母の騎士」誌に数回に亘って掲載されたという。伯父は 3 年余り数回に亘る長崎の被爆検診調査に於いて 1946 年 5 月からは特に前任者が九大を辞めた為に団長を務めたという。丁度コルベ神父の死の知らせが届いた頃であり、それは伯父の耳にもすぐ届いた事と思う。母親の出身地である長崎、特に浦上の変わり果てた姿を目の当りにし、手の施しようのない悲惨な状況の被爆者を前に苦悩したであろう伯父が、コルベ神父所縁の教会に毎日のように通っていたというこの話を数年前に聞いた時以来、聖母の騎士修道会とコルベ神父の名前が改めて心に残っていた。今回の巡礼ではコルベ神父所縁の地も訪ねる事になっていた。いよいよ出発間近になって更に思いがけない事があった。それまで録画したものの内容が内容だけに気が重くなかなか見る気になれなかった、ワルソーの蜂起やアウシュヴィッツをテーマにした番組を、これも巡礼の予習と思い見ることにした。その一つにエヴァというアウシュヴィッツを生き抜いた女性の話があり、それが体験記として出版されているのを知ったが、驚く事にそれを日本語に訳したのが百合ヶ丘教会の吉田寿美さんとわかったのである。吉田さんとは以前から所属する某キリシタン研究会にお誘いして、共に学ぶなど親しくさせて頂いていた。たまたまミサで隣あわせとなり、今回の巡礼でポーランドを含む東欧を訪れるという話をした時、彼女の口から 1991 年『エヴァの時代』という翻訳本を出した事、それを出すきっかけになったエピソードなどを聞かされたのである。エヴァという女性は母親と共に過酷な収容所から奇跡的に生還するが、やはり「アンネの日記」のアンネ・フランクの父親で、家族の中で唯一生き残る事が出来たオットー・フランクと、彼女の母親が再婚したというのである。吉田さんは娘時代に「アンネの日記」を読んで深く感動し、オットー・フランク氏に手紙を出し本人のもとを訪ね、長く交流を続けて来られたとの事、それがアンネの義理の姉妹であるエヴァの著書を翻訳するきっかけになったとの事である。吉田さんからは早速手元に 2 冊だけ残っていたという本を送って頂き、その感銘深い内容を出発

直前に読み上げる事が出来た。その他にもたまたまこの巡礼の事を告げたベルギー在住の知人から、丁度2年前に訪ねたからとアウシュヴィツ関連の資料を送って貰うという事もあり、これら一連の出来事により、大げさなようだがこれはかの地に導かれるのだという思いで旅立った。

1) ポーランド

8月21日　ワルシャワ

ポーランドまでは直行便が飛び、飛行時間も10時間ほど。8月21日、現地時間の14：00にワルシャワ・ショパン空港に降り立った。我々巡礼団一行を現地合流のパウロ神父、2人のシスター、現地ガイドのバルバラさん、娘が東京在住というポーランド人の女性らが私たち全員への愛らしい花束を用意して出迎えて下さるという、感動的な巡礼のスタートとなった。早速空港内の聖堂で感謝の祈りを捧げ、バスに乗り込んだが、私たちの為にさらにドミニコ会の紋章の付いた赤いスカーフを用意して下さっていて、一同それを首に巻いてすっかり巡礼者の気分になったが、有難い事にポーランドの思いがけない寒さの為、寒さ凌ぎの役目もしてくれる事になった。旅の前半は気温が12度になる日もあり、震え上がってしまったが、異常気象はやはり世界的なものと実感した。後半はすっかり真夏の気候に戻り連日快晴に恵まれた。空港からワルシャワ市街までずっと緑が溢れ、市街地に入ってもまるで森の中に町があるといった感じで、思い描いていた通りの美しさに目を奪われた。穏やかな風景にうっとりしていところ、突然「スターリンの贈り物」という右手前方に見えた背の高い時計台の説明があった。1955年に建てられたものでスターリン時代の暗い記憶を思い起させて、市民に忌み嫌われている建物との事。これ以後この旅の間中、私たちはしばしば共産主義政権下の厳しい状況について聞かされる事になる。殊にカトリックに対する弾圧に関しては想像を超えるものがあったようだ。訪れた3カ国は戦後半世紀近く、キリスト教迫害の時代を生きてきたと知る。

以下この日の行程に従って記す。

① 昼食

旧市街の旧王宮内レストランでとる。旧市街は建物の形、装飾、色合いどれをとっても現実離れをした美しさで、これが第2次大戦中徹底的に破壊しつくされ、戦後復元された町並みとは俄かに信じられないほどであった。戦前撮影された映像などを元に、がれきの1つも無駄にしないで忠実に復元されたとの事。眺めているだけで、当時のワルシャワ市民の復興にかける熱い思いが痛いほど伝わってくる。昼食はなかなか豪華で美味しかったが、この最初の昼食に始まって、毎日のように美味しい食事が続き、巡礼なのにちょっと贅沢かなと思うほどであったが、食事も楽しめるのは本当に有難い事である。この美味しい食事のおかげで全員元気に巡礼を終える事が出来たとも言える。

② ピアノコンサート

同じ王宮内のホールで女流ピアニストによるショパンの演奏を聴く。折角このコンサートを企画して下さったパウロ神父には申し訳ないが、正直言ってピアニストは腕力で弾いている感じで、ショパンらしい情感が伝わらず、期待した「ワルシャワで聴くショパン」をあまり楽しむ事が出来なかった。

☆ガイドとしてポーランド人のご主人とパリで出会った(当時ご主人はパリ亡命中)という藤田みほこさんも加わる

8 月 22 日　ワルシャワ市内

① 聖ファウスティナ修道院

カトリック教会は 2015 年 12 月 8 日(無原罪の聖マリア)～2016 年 11 月 20 日(王であるキリスト)までを「いつくしみの特別聖年」と定めた。その時シンボルとして全世界の教会に掲げられたのが、聖ファウスティナの見たイエスのヴィジョンにより描かれた絵である。それはイエスの長衣の胸元の開いたところから赤と青白い 2 本の大きな光が放たれているという姿である。

聖ファウスティナは 1905 年ロシア統治下の小さな村で生まれた。1925 年彼女の前にイエスが現れ、「あなたが見ている通りに絵を描きなさい。そこには“イエスよあなたに信頼します”と書き込むように。私はこの絵が崇敬される事を強く望む。まずあなたたちの聖堂で、そして全世界中で。私はこの絵を崇敬する人は滅びないと約束する。さらにこの世ですでに、また臨終の時に敵を打ち負かすことも約束する。私はその人を私の誉れとして守る」と告げられたという。聖ファウスティナは 2000 年 4 月 30 日、ヨハネ・パウロ 2 世によって列聖された。

聖ファウスティナはこの修道院に入会するのに、始め 2～3 回断られたという。この場所で彼女は 33 歳の若さで帰天している。

② カトリック情報教区　ＫＡＩ

修道会の敷地内にある。ポーランドの教会の中心であり、司教団が集うところ。現在 20 人の人が働いている。元々この場所はユダヤ人街であったとの事。

クリストファ氏による案内。

ＫＡＩは 1992 年創立、日本で言えばカトリック中央協議会の役割をしている。その活動として 1、ポーランド教会の情報を伝える事、2、ローマ法王の動向や全世界のカトリックの動きを伝える事、3、ポーランドには 40 教区あり、各教区の情報を集積する事、４、カトリック教会に限らず、エキメニュカルな情報を伝える。諸宗教との対話。ポーランドの東南部にはギリシャ正教会があり、プロテスタント教会もある。毎年 1 月にはこの場でユダヤ教の為のお祈りも行われる。5、ＫＡＩは大きな存在であり、機関誌も発行しているという、以上のような説明であった。

この建物に 3 つあるという聖堂の 1 つに行き司教の話を聞く。

「1980 年にこの建物が出来た。それまでプリスマに集まっていたが、狭くなりこの土地に移った。その時はまだ共産主義政権の時代であったがそれは可能となった。現在ポーランドには 96 人の司教がいる。1944 年のワルソーの蜂起の折り、この修道会も被害を受け。シスターはたった 1 人しか助からなかった。ユダヤ人のゲットーがすぐ側にあったが、当時シスター達は食糧を届けるなどして援助した。共産主義政権の時代、この建物にも盗聴器が付けられたが、秘密警察は何でも聴き取ろうとした。この聖堂にはヨハネ・パウロ 2 世の聖遺物も安置してある。」

司教は場所を会議室に移して、更に色々な事を話してくださった。年 4 回司教が集まり、重要な事を決めていて、会議中は司教以外誰も入れないとの事。会議室内に飾られた聖像や絵画についての解説があった。まずドイツとの和解の印という聖ボニファチアの木彫についてであるが、ポーランドの司教団がドイツの司教団にヴァチカン公会議後“私たちは許します。私たちを許して下さい”という有名な手紙を書き、和解の印として「黒い聖母」を贈呈したが、その返礼としてこの像がプレゼントされたという。ヨハネ・パウロ 2 世はドイツのサポートがなければ生まれなかったとの話である。次にロシアとの和解の印である聖母子像のイコンについてはモスクワの大司教からのプレゼントであり、返礼として「黒い聖母」を贈呈したという。

「黒い聖母」とは、チェンストホーヴァ、ヤスナグラの黒い聖母像である。この絵の模写は修道院の聖堂やこの会議室にも掲げてあり、以後各地の教会で目にする事になる。ドイツと旧ソ連との和解の活動の為にまず教会が動いた。50 年経って和解の実が育ったが、当時は裏切り者と言われる事もあったという。

「敵を許せば自分の受けた傷が癒される。和解すれば楽になる」と司教は更にサムエル記上 24 章を引いて、「サウロはダビデを追いかけるが、神の手によって正義が行われているからとダビデは(殺すチャンスがあったのに)サウロを手にかけない。裁くのは神であり、神は正義そのものである。神の正義によってサウロの追求はやみ、ダビデは王になる」。ステファン・ヴィシンンスキ枢機卿の言葉も引用「許す事は心の自由をもたらす。相手に対して悪い事をしない。神の手に委ねる。神の恵みをもって人間の傷を癒す。恵みによって心が癒されるとわかる。報復をしない。」

司教の許しと和解の話は私たち巡礼団の心を強く打った。それはポーランドがナチスと旧ソ連から到底許す事の出来ない傷を負わされた事を、私たちが少しでも知っているからである。これ以後訪ねる 3 カ国で、共産主義政権によるカトリック迫害時代に、いかに教会が戦ったかを知る事になる。アウシュヴィッツ強制収容所という、後日ナチスの最大・最悪のユダヤ人迫害の地を訪れる事になる私たち巡礼団一行の為にも、この司教のお話しを最初に聞けた事はとても良かったと思う。

ＫＡＩを後にしてポピュエウシュコ神父の記念聖堂に向かう。パウロ神父にアウシュ

ヴィッツを訪ねる予定になっているがその前に、ユダヤ人が戦前に暮らしていた地域をバスで巡って欲しいとお願いしたところ、ゲットーの記念碑があるところと、ユダヤ人が貨物列車に乗せられて出発した「ウムシュラクプラツ」という駅の跡を廻って貰えた。駅跡に記念碑が立っているのが見えたが、あそこから家畜のように貨物列車に詰め込まれて、死の旅に旅立ったかと思うと胸が痛んだ。現在その地域にユダヤ人墓地があり、イスラエルから若者の巡礼団が訪ねてくるとの事。それを聞いてワルシャワ・ショパン空港でそれとわかるユダヤ教独特の姿をした一団を見かけたのを思い出した。

車窓から沢山の十字架を乗せたトラックの異様なモニュメントが見えたが、「カチンの森事件」のモニュメントとの事。1939 年、ソ連のポーランド侵攻により捕虜になったポーランド将校ら 1 万数千人が、ソ連当局によって殺害された事件である。ポーランドの有名な映画監督アンジェ・ワイダの父親もこの事件で亡くなっており、監督は 2007 年「カチンの森」という映画を制作している。驚いた事にパウロ神父の伯父(母方)もこの事件の被害者ときかされた。

③ ポピュエウシュコ神父の記念聖堂(スタニスラフ・コスティカ教会)

聖ポピュエウシュコ神父は 1984 年、37 歳にして共産党政権より殺害されたが、それは殴られた後ダムに沈められるという残忍なものだったという。殺害理由は「ポーランドは自由な国になる」という説教をした事によるという。敷地内の石と鎖で形作られたポーランドの地図の中に十字型の墓碑があり、沢山の花やローソクが供えられていた。聖堂前庭には神父の当時の生前の姿を示す写真も数多く掲示され、裏手には質素な木造の生家も移築保存してあり、事件から数十年経っても変わらない、ポーランド市民の神父に対する強い崇敬の念を感じた。

この後暫く旧市街を散策

④ ドミニコ会の教会

この地域には城壁も残っているが、戦時中爆弾が落ち大変な状況になった地域との事。

⑤ キューリー夫人(1867～1934)の生家

現在博物館になっているが、元々学校だったとの事。この学校の教師であった親のもと、この建物の片隅で生まれたという。24 歳までポーランドで暮らした後フランスに渡った。同じ分野で 2 度ノーベル賞を得ている。

⑥ ある建物の中で戦前・戦後のワルシャワを写したドキュメンタリーを見る。廃墟と化した街の映像が痛ましい。

⑦ ワルシャワ大聖堂

先に司教の話にも出て来たポーランドが一番大変だったスターリンの時代、共産主義と戦ったステファン・ヴィシンスキ枢機卿が祀られている教会でもある。ポーランドはどこの教会を巡っても、祭壇に飾られた白を基調とする花の美しさが目をひく。そんなところにもポーランドの人々の教会を大切に思う気持ちが感じられる。

⑧ 昨日昼食をとったレストランのある王宮

大戦で全壊したが、再建の象徴ともなった建物。内部にあった貴重な品々は戦争が始まる時運び出して無事だったとの事。国民と全世界からの寄付によって再建された。

⑨ 文化省の建物の前の通りに「ワルソーの蜂起」で戦った人物の写真を一人一人等身大に引き延ばしたものが幾つも置かれていた。日本のテレビ番組でも放映していたが、最近になって、当時のフィルムに写った人物を追跡調査して割出し特定出来たようである。調査の結果かなり亡くなっているのがわかったが、未だ存命の人もいて、番組では彼らに当時の模様をインタビューしていた。

「ワルソーの蜂起」は 1944 年 8 月、ナチスに抵抗して国内軍が蜂起して戦ったもので、当初優勢であったが、結局鎮圧されてしまう。すぐ側まで来ていたソ連軍は援軍する事もなく見殺しにした事が知られている。この蜂起への報復としてワルシャワの街は徹底的に破壊されたとも言われている。ワルシャワの街並みは実に美しいが、いたるところに哀しみの記録が刻まれている。

⑩ ヴィジトキ教会

ショパンが若い頃オルガニストをしていた教会という。18 世紀の建造。

⑪ ショパン、ポーランドで暮らした最後の家

私たち一行が散策したクラクフ郊外通り(旧市街のメインストリート)には、触れるとショパンの曲が流れるベンチが幾つか置かれていて、私たちも鳴らしてみたりした。今もポーランドの人々に深く愛されているショパンだが、ナチスがポーランドに侵攻して最初に行ったのが彼の大きな銅像を破壊する行為だったという。

⑫ 聖十字架教会

ショパンの心臓が安置されている事で知られている。この心臓はショパンの姉によって運ばれてきたものというが、大戦中は疎開して守られたとの事。

⑬ ドミニコ会の教会において、一般信徒に交じって夕べのミサに与る。近代建築の天上の高い荘厳な建物。何人ものドミニコ会士が祭壇に並び、祭壇横でも彼らによる聖歌が歌われていたが、意味はわからないもののとても美しい響きだった。私たちも特別に聖体拝領の後同じ場所で、聖歌「あめのきさき」を歌わせてもらう事が出来、良い思い出となった。ミサ終了後出口のところで信徒の 1 人が駆け寄って褒めてくれた。

この日初めてお土産を買う。琥珀の店が目につくが、素朴な木彫の人形が数々売られていた。所謂「エッチェ・ホモ…この人を見よ」という裁かれるキリストの像の木彫が目を引いた。日本では潜伏キリシタン時代、踏絵にもなった図像である。以後各地でこのテーマの聖像や絵画を見かけた。パウロ神父に何故そのようによく目にするのか聞いてみたが、わからないとの事。ただ裁判所にもこの聖画が掲げられているという。白木のいかにも手彫りといった感じの「エッチェ・ホモ」を求めた。他にユダヤ人の木彫の人形も眼を引い

たが、イスラエルからの巡礼者向け土産品なのだろうか。楽器を持つ小さな像を 2 体求めた。戦前までワルシャワの人口の 4 割近くがユダヤ人だったと最近になって知ったが、それほど多かったとはちょっと意外で、ユダヤ人迫害についての認識が 1 つ新たになった。

8 月 23 日　ニエポカラノフ→ジェラゾヴァ・ヴォラ→ギドレ

① ワルシャワ近郊ニエポカラノフのマキシミリアノ・マリア・コルベ神父所縁の地を訪ねる。

コルベ神父は 1927 年、ニエポカラノフに修道院を設立。彼の建てた聖堂でこの日のミサを行う。今回の巡礼にはインド出身でフランシスコ会のクマール・ヴィンセント・プラヴィン神父も個人参加していて、毎日のミサの司式は常にパウロ神父とヴィンセント神父の 2 人で行われた。

木造の温かな雰囲気の聖堂の隣には、コルベ神父が寝起きしていたという狭く質素な部屋や、身に着けていた祭服や使用していた祭具などが展示されていた。敷地内には博物館やバジリカもある。博物館には写真や神父ゆかりの品、日本で発刊された「聖母の騎士」誌や神父をモデルにした木彫などが展示されていたが、アウシュヴィッツの縞模様の囚人服が一際目を引いた。1939 年この場所でゲシュタポに逮捕され、収容所には「政治犯」として送られたという。

コルベ神父の略歴

1894 年　ポーランドのズドゥニスカ・ヴォラで織物職人の息子として生まれる
1910 年　コンベンツァル聖フランシスコ会に入会
1915 年　ローマのグレゴリアン大学で哲学の博士号取得
1917 年　「汚れなき聖母の騎士会」創立
1919 年　聖ボナベントゥラ大学で神学の博士号取得
1927 年　ニエポカラノフ修道院を創立
1930 年　来日、長崎で「無原罪の聖母の騎士」を出版
1936 年　ポーランドに帰国
1939 年　9 月 1 日ドイツ、ポーランドに侵攻、19 日逮捕されるが、後釈放。
1941 年　2 月 17 日に 4 人の司祭と共に再逮捕、同年 8 月身代わりとなって
　　アウシュヴィッツで餓死刑を受けるが、最後は薬殺される。
1971 年　パウロ六世によって列福
1982 年　ヨハネ・パウロ二世によって列聖

このよく知られたコルベ神父の「身代わりの死」であるが、私の中に長い間 1 つの疑問があった。それは何故フランチシェク・ガヨヴィニチェクというポーランド軍の軍曹と、身代わりを申し出たコルベ神父の 2 人ともが、その場で即射殺されなかったかという疑問

である。当時のナチスのやり方を思えば、身代わりを申し出ることさえ論外だったはずである。その疑問は前出の『身代わりの愛』により解けた。小崎氏は聖母の騎士修道会の修道士であるが、ガヨヴィニチェク氏に 3 度面会し、当時の話を直接聴いてこの著書を著している。それによれば、コルベ神父が身代わりを申し出た時、ガヨヴィニチェク氏とその場にいた者は、まずコルベ神父が撃たれなかった事に驚いたという。当時少しでも列を乱せば即射殺だった。さらにその時普段収容者には口もきかない所長が直接神父に話かけ、身代わりを承諾したという。それには周囲にいたナチスの親衛隊も驚き、後になってこの件で所長を非難したほどだったという。正に「身代わりの死」自体が有り得ない事だったのである。こうして命を救われたガヨヴィニチェク氏であるが、収容所にいる限り無事に過ごせるはずもなく、その後何度も死に直面しながらも、生きながらえ生還する事が出来たという。その事もほとんど奇跡的と言ってよい状況で、戦後氏はコルベ神父の語り部となって生き、長寿を全うしたという。身代わりによる死も尊い出来事と思うが、コルベ神父によって助けられた命がその後も不思議なほど守られたというこの事実にも深い意味を感じる。

ニエポカラノフのバジリカを見てショパンの生家に向かう

② ジェラゾヴァ・ヴォラのショパンの生家

ショパンの生家と言っても元々スカルベク家の屋敷であり、父親がその家の家庭教師をしていて、1810 年この屋敷の片隅で生まれたという。兄弟は 4 人。彼は 20 歳の頃に故国を離れているが、ショパンの曲には全てポーランドの魂が入っていると言われており、“花畑の中に大砲が秘められた音楽”とも評されているという。敷地内の庭園の美しさが印象的だった。

敷地内のレストランで、ピロシキとギョーザを足したような名物料理を食べたが、なかなか美味しく、ちょっと長野の「お焼き」のようでもあった。

③ ギドレの聖母

25 年間日本で過ごされたというユリアン神父の案内により見学。巡礼者が増えた為ドミニコ会が世話を頼まれ、以後 400 年に亘って関わっているとの話。聖堂は 1656 年に献堂。被昇天の聖母に捧げられている。ギドレの聖母の由来であるが、1516 年、農夫が牛で畑を耕していたところ、牛が突然脚を止めて跪いた。驚いて地面を見ると、小さな聖母子像があったので家に持ち帰りタンスの中にしまった。すると家族の者の眼が見えなくなった。それを聞きつけて助けにきた近所の人が、タンスの方から良い香りがするので開けてみたところ聖母子像が入っていた。土から掘り出したと聞いて驚き、300m離れた教会に持って行き神父に見せたという。この出来事はルターの宗教改革の前年に起きた。当時聖母信心はルター派から“百姓の信仰”と呼ばれ蔑まれていた。ルターの宗教改革と同時期の出来事というところに意味がある。この像の出

現から 200 年後、31 人に奇蹟が起こり死から蘇った。21 名の盲人が癒され、あらゆる危険から 236 人が助かったと伝えられている。

5 月にこの聖母子像をワインの中に漬ける。このワインを飲むと心身の痛みが癒されるという(私たち一行も小さなビンに入ったこのワインを 2 つ貰った)。5 月には聖母行列も行われるとの事。この場所の事をルター派は否定するが、何かのお恵みが頂ける場所であると、以上のような解説であった。

パウロ神父の話

ルター派は神秘性を排除したが、その考え方は後にナチスの思考に繋がって行く。ナチスは奇蹟や秘跡を否定。ユダヤ人のものであるからとして、旧約聖書も否定している。

④ 聖アンナ修道院(ドミニコ会の観想修道会)

1206 年、異端者であった女性が改心して始めた修道会。ドミニコ会は男子が宣教活動をし、女子は霊的な祈りをして観想の生活を送る。

この会のシスター・ゼンディスラバが格子越しに、修道会の生活について話をしてくださった。実に晴れ晴れとした明るい表情で話をされ、何か懐かしさと温かさを感じさせるシスターであった。私たちの来訪をとても喜んで下さっている事がひしひしと伝わった。シスターの話は下記の通りである。

「当時の教会の状態は現在に似ている。沢山の人が洗礼を受けているが、信じていると言えるだろうか。神の言葉は変わらない命を持っている。現代の宣教師は 13 世紀と同じように神の言葉を伝えている。(聖職者は)自分自身でまず御言葉を生きなくてはならない。共同生活をして一緒に祈り食事し会話する。私たちと話した巡礼者は、間を隔てる格子を見て刑務所のように感じるようだ。しかし格子は自由の象徴・特権のようなものであり、荒野にいる恵みを感じる。私たちは召命を信じている。この会は 810 年の歴史があり、ポーランドにおいては 350 年の歴史がある。この地にきて 150 年になるが、最初はクラコフにいた。この地はロシアの領域に入っていたのでクラコフから移動させられた。修道女たちは移動させればこの場所では生きていけず、どうせ死んでしまうだろうと思われていた。しかし私たちは死ぬことなく生き延びた。20 世紀始めロシアの態度が少し軟化して、求道者を受け入れて良い事になり、2 人の求道者が入会した。現在修練院に 2 人の若いシスターがいて、全員で 26 人。召命は教会において必要と信じている。フィリピンやアルゼンチンに同会のもっと大きな会がある。私たちは跪いて(祈り)教会の様子を見て、“見張り番”の役目をしている。

教会は社会においても役割がある。洗礼を受けても信じていない人がいるのが問題である。」

修道院の生活費について

聖アンナのバルサム(軟膏)の製造・販売。ハーブ入りのもので19世紀からのレシピで製造。聖アンナの名を唱えながら患部に塗ると良いという(私たち一行は何と2個もこのバルサムをプレゼントして頂いた)。それにロザリオや典礼に関する品を制作。その他神学的な記事を英語からポーランド語に翻訳する事、イコンの制作、養蜂などで生活の糧を得ているとの事。

シスター・ゼンディスラバは修練院を担当し、時々教会でオルガンを弾くこともあり、イコンを描く事もあるという。“美しさは神の名前の1つ”と言い、美しさに対して眼と耳を開く事の大切さも語られた。そして最後に私たちの来訪を「修道院の歴史の中に刻みます」と言ってくださった。

修道院の敷地内にはこの場所がチェンストホーヴァへの巡礼路に当たる事もあって、何人もの巡礼者や、結婚式の車のように飾りたてた巡礼車が駐車していた。巡礼は苦行ではなく喜びに溢れた行いという事なのだろう。

この日はチェンストホーヴァの黙想の家に宿泊。ベッドは手狭だったが、清潔で居心地がよく、食事も美味しかった。

8月24日　チェンストホーヴァ→アウシュヴィッツ→クラコフ

① チェンストホーヴァ、ヤスナグラ(光の丘)修道院の「黒い聖母」

1382年に聖パウロ修道会の為に建てられた。頬に傷(1430年、盗賊に切り付けられたという)のある「黒い聖母」で有名であるが、聖書にも「私の顔は黒い」とあるという。ワルシャワでステファン・ヴィシンスキ枢機卿が祀られた大聖堂を訪ねたが、枢機卿は戦後ポーランドを支配した共産主義政権が、ポーランド人の心の支えであるマリアの影響力を弱めようと謀った時、ポーランド全土の教区や家庭へ、チェンストホーヴァの「黒い聖母」を広めるため1957年からおよそ25年に亘る巡礼の旅に出たという。

聖母像は何度も秘密警察に没収されたが、人々は絵の入っていない額縁さえ信頼したという。その巡礼の長い旅が終わる前年の1978年、クラコフのカロル・ヴォイティワ司教が新しいローマ法王に選ばれたという。ヨハネ・パウロ2世である。

17世紀にはチェンストホーヴァに「黒い聖母」を模写するギルドがあったとの事(以上、『101のマドンナ　ポーランドイコン巡礼』塚原琢哉著　1999年　毎日新聞社より)

大聖堂の中の小聖堂でこの日のミサが挙げられた。この日はインドで布教した聖バルトロマイの祝日。

パウロ神父の説教

「観想の恵みは霊の働きかけである。霊に満たされて天国を見る…7歳の時にそういう体験をし、3、4分天国にいる感じがした。その時司祭になるという人生の道が決まったが、厳しい時代だったので、簡単に神父になると口に出せなかった。

ロザリオを唱えながら天国に導かれていく。ロザリオは天国に登る“霊的リズム”となる。」

ヴィンセント・プラヴィン神父はミサの途中、祈りをインドのメロディーで唱えられた。初めて聴くエキゾチックな祈りの節であった。

ミサ後神父に共産主義政権下、巡礼は可能だったのかと聞いたところ、出来るのは出来たが、学校側がわざと行事を設けたりして、行かせないように妨害したとの事。

神父になりたいという気持ちは表に表わす事は出来なかった。表わした場合、進学の道も閉ざされたという。

黒い聖母礼拝

聖堂内は多くの巡礼者で溢れていた。「黒い聖母」が安置されている祭壇には仕切りがあったが、皆そこに来ると跪いてそのまま進み祭壇の回りを一周していた。膝の痛みを堪えながら後に従って回ってみたが、祭壇の裏側には多くの目が彫られた金属のプレートが壁に掲げられていた。病が癒された人の寄贈と思われる。「黒い聖母」は写真などで見る限り暗く物悲しい印象であるが、「スキェンカ」というキラキラ輝く金属板に覆われたその像の実物は、意外にも穏やかで親しみやすい雰囲気を漂わせていた。何百年も人々に崇敬され、国の危機にも拠り所とされてきた聖母像らしい温かみを感じさせた。

② アウシュヴィッツ博物館

クラコフの西 54 キロに位置するアウシュヴィッツ(オシフィエンチム)強制収容所は、現在博物館となっている。ナチスが作った収容所は数多くあり、その半数以上がポーランドに集中し、中でもその残虐さでもっとも知られた場所。ここは 1940 年、始めはポーランド人の政治犯を収容する為につくられたという。アウシュヴィッツという名はナチスが勝手につけたものだという。当時この周辺に住んでいた人達は強制的に立ち退かされた。

事前に入館に際して手荷物の検査があり、持ち込める手荷物はA4 の大きさに限られる事、リュックは不可と言い渡された。博物館入口は大勢の見学者で溢れ、人数制限を受けながら手荷物検査場に入った。パウロ神父は最初にこの地を訪れた時、後で具合が悪くなったという。私たちも少々緊張しながら検査を受け、説明のトランシーバーを受け取ったが、案内の女性がいかにも現代的で若くチャーミングであるのを見て何故か少しほっとした。ポーランドに入国以来ずっと不安定な天気が続き、寒さにも悩まされていたが、この日はよく晴れ渡り、その事だけでも救われた気分になりながら、有名な「働けば自由になる」という文字が掲げられた収容所のゲートを入った。いよいよ収容所敷地内である。レンガ造りの建物が整然と建ち並び、その間には緑の葉を茂らせた木々が並んで立っている。背の高い鉄条網さえ目に入らなければ、古びたレンガと緑が良くマッチしていて、佇まいは想像していた感じと違いむしろ美しいとさえ感じた。当時はこのような木立もなく陰惨な雰囲気だったと思うが。アウシュヴィッツには 2 つの収容所

があり、訪れたのは第 1 収容所である。ビルケナウと呼ばれる第 2 収容所も見学予定であったが、時間がなくなり割愛せざるを得なかった。第 1 収容所は元々ポーランド軍の施設を利用したものだという。当時ナチスは被占領地１７カ国に 900 余りの強制収容所を作ったというが、アウシュヴィッツはスロヴァキアとの国境近くでヨーロッパの真ん中に位置し、各国から捕虜やユダヤ人を連れてくるのに都合が良かった為選ばれたという。28 ヵ国から 130 万人もの人々が連れてこられ、その内訳はユダヤ人の他、ロマ(ジプシー)やソ連軍の捕虜、ポーランド人だったというが、この内 110 万人の人が死亡。全体の死亡率 85%を占め、その内の 90%がユダヤ人だったという。門を入り、まず炊事場跡の前を通ったが、ここでユダヤ人の収容者で編成されたオーケストラが日々演奏していたという。『死の国の音楽隊　アウシュヴィッツの奇蹟』(音楽の友社 1994 年)という収容所生き残りの 2 人のユダヤ人が書いた本に、彼ら楽隊の当時の生活の有様が描かれている。それによればよく言われるようにオーケストラは、ガス室に送られる同胞の為に演奏する目的で編成されたのではなく、音楽好きなドイツ人の楽しみの為だったという。音楽の演奏に聴き入る時の彼らは一ドイツ人に戻り、穏やかな表情さえ見せたという。彼らがあまりに音楽好きな民族だった為に自分たちは生きながらえる事が出来たという。よく知られているように、ユダヤ民族の中からは現在に至るまで多くの名演奏家を輩出している。

一つ一つの建物中に入って見学。内部に入ると外観の穏やかな雰囲気が一転し、ただひたすら救いようのない陰惨な展示物を見る事になった。

4 号棟

ここでは遺灰の入ったモニュメントや、コルベ神父の死亡証明書などを展示。ナチスが撮影したという 200 枚以上に上るという当時の写真。ビルケナウのガス室など破壊して証拠隠滅をはかったにもかかわらず、これらの写真は処分しそこなったという。1944 年ハンガリーから送られて来たユダヤ人の 80%がガス室送りになったという。2 階にはガス室のジオラマや、ガス室で使用されたチクロンＢという劇薬も展示されていたが、元々殺虫剤用で、その発明者はなんとユダヤ人との事である。2 階に上がる階段がすり減って波打ったようになっていたのが印象的だった。

5 号棟

この建物には殺害された人々の遺品の数々がガラスケースの中に展示され、思わず目を背けたくなるものばかりであった。薬の為に灰色に変色した髪の毛、大変な量であったが、展示されているのはごく 1 部との事だった。この髪の毛で布地も織られたという。鞄類には再び自分たちに返してもらえると信じ込ませる為に、大きく印がつけられているのが余計に哀れを誘う。1 つの部屋の端から端まで積み重ねられて展示された、あまりにも膨大な数の靴の山。男女も子供の物も入り交る古びた靴の中に、まだ赤い色を残したサンダルも見える。もう 1 つの部屋には無数の食器類。生活の匂い

がするようでより痛ましさを感じる。ユダヤ教の儀式に使われるマントの展示もあった。祈りの場が与えられると信じていたのだろう。何を見てもどれほどの数の人生が奪われたのかと、改めて痛ましさに胸が締め付けられる。小学生の頃、父の本棚に『夜と霧』という本を見つけて、その内容にショックを受けたのを思い出す。一見小奇麗に整えられた部屋があったが、それは「カポ」と呼ばれたユダヤ人の中から選ばれた監視人の部屋との事。彼らの同胞に対する酷い仕打ちはよく知られているが、そのような態度を取らなければ、自分たちの身が危うかったようである。

死の壁

屋外にある、数千人もの人が銃殺されたという処刑場。弾を節約する為か銃殺の方法として、1 人につき首元に 1 発と決められていたという。私たち一行の中で折り鶴を準備していた人がいて、1 人 1 人花束やローソクと共に捧げた。

11 号棟

収容所内の刑務所。地下に「餓死牢(18 号牢)」・「窒息牢」・「立ち牢」という処刑室があった。「餓死牢」はコルベ神父が亡くなった場所であり、ヨハネ・パウロ 2 世が供えたローソクや花などが置かれていた。想像していたより狭い気がした。「窒息牢」はすぐ死なないように小窓が開けてあったという。「立ち牢」は 90 ㎝×90 ㎝の所に 4 人を立たせるというもの。想像しただけで、人間の生理として 1 時間でも無理と思えた。何れもいかに苦痛を長引かせ、あげく死に追いやるかという事を考えて作られた処刑室である。コルベ神父も 2 週間生きながらえたあげく、最後は注射による死であったという。人間の悪魔的な発想は際限がないと言える。

点呼広場

労働から戻ってきた人々を、脱走者がいないかどうか調べる為に点呼した場所。1 人の逃亡者が出た場合 10 人が見せしめに処刑されていたという。全員揃うまでの点呼は最長で 19 時間もかかった時もあったという。それでも奇跡的に脱走出来た人たちもいたとの事。ナチスの軍服を着て正門から堂々と出ていったとの話である。この時は見せしめの処刑は行われず、見逃したドイツ人が処刑されたという。先の『死の国の音楽隊』によれば、ナチスの兵隊の中にもユダヤ人と通じ、便宜をはかったり、逃亡の手助けをする人たちがいたようである。

1 号棟(ガス室・焼却炉)

最初のガスによる処刑には 600 人のソ連人捕虜を実験として使ったという。焼却炉は現在 3 つあったうち 2 つが残されている。当時 1 日 340 人もの遺体が焼かれたという。第 2 収容所のビルケナウのガス室はナチスによって破壊されたので、この場所は当時の大量処刑の証拠として貴重との事である。大きなガス室では死にいたるまで 15 分もかかった場合もあったという。この場所の陰惨な雰囲気は例えようもなかった。

第 2 収容所、ビルケナウ

第1収容所から2キロほど離れた場所にあるビルケナウは、バスの窓から眺める事になったが、1・4㎢と言われる広大な敷地に幾つものバラックが整然と立ち並ぶのが見えた。その数300棟以上との事である。映像や書物でもよく目にしてきた「死の門」が目に入る。そこに運ばれてきたユダヤ人の中には、つい数日前ワルシャワで見た駅の跡地から貨車に乗せられて来た人々も多かった事だろう。パウロ神父の話ではある意味第1収容所よりビルケナウの方が悲惨かもしれないとの事。未だに掘れば骨が出てくるとの事である。ビルケナウは主に女性が収容された事でも知られているが、この地に収容された中で、ユダヤ教から改宗しシスターとなったカルメル会の聖エディト・シュタインという人物がいたとの事である。ユダヤ人絶滅政策が始まった1942年にガス室で亡くなっている。非常に優秀な女性で「十字架のヨハネ」の研究者としても知られているとの事である。鈴木宣明著『エディット・シュタイン　～愛の為に～』(聖母の騎士社1998年)によれば、1891年、ポーランドのヴロツワーフ(当時はドイツ領)の敬虔なユダヤ人の両親の間に生まれたシュタインは、始め無神論者だったという。大学で哲学や心理学を修める内にフッサールの助手となる。1917年、哲学の博士号を取得。アビラの聖テレジアの『自叙伝』と出会い、聖イグナティウスの霊操を体験。1922年カトリックに改宗。教育者として活動するが、1933年、ナチス政権により教職から追われる。その年ケルン・カルメル修道会に入会。ナチスのユダヤ人迫害が強まるなか、修道会の配慮により1938年、オランダのエヒト・カルメル会へ移動するも、1942年8月2日ナチスに連行され、その僅か1週間後にガス室で命を落とす。逮捕の直前まで『十字架学－十字架のヨハネに関する研究』の執筆に打ち込むが未完に終わる。1998年列聖された。

1つの民族を絶滅させるという狂気の発想の前には、人間の尊厳はゼロに等しいという事の恐ろしさを改めて思う。今こうしてアウシュヴィッツ強制収容所の事を思い出しながら書いていても胸が痛むが、それ以上に胸が悪くなる。

③ 昼食、ポーランドとドイツの交流施設

収容所の近くにあり、ポーランドとドイツの交流の為の施設という事であるが、「和解」という意味もあるのだろう。一行はつい先ほどあれほど惨たらしい現場を見て来たというのに、一向に食欲が落ちる事もなく、自分たちでもあきれながら美味しく食事を頂いた。

昼食後、クラコフのバドヴィツエに向かった。アウシュヴィッツをほんの少し離れただけで、いつもの長閑で美しいポーランドの風景が車窓に広がる。

④ バドヴィツエ　ヨハネ・パウロ2世の生家

この地から350キロ先がウクライナとの事。まずバドヴィツエの聖堂を訪ねる。聖堂入口の右脇にヨハネ・パウロ2世の銅像が置かれていた。聖堂内には法王の洗礼台も安置

されていたが、丁度結婚式の真最中だった。

⑤ ヨハネ・パウロ 2 世の生家と記念館

法王の父親は軍人であり、9 才で母を亡くしているが、同年 14 才上の兄も亡くなったという。父親も 22 歳で亡くしている。本名はカロル・ヴォイティワであるが、子供の頃は俳優志望だったという。成績優秀でクラコフの名門大学に入学。生家には両親の写真や父親の軍服や母親の使っていたミシンやバッグといった遺品なども展示されていた。法王が第二次大戦中から亡くなる時まで、ずっと身に着けていたというスカプラリオが展示されていた。明治以降日本の長崎など潜伏キリシタンの末裔の地に於いても、信徒がスカプラリオを身に着ける習慣があったが、日本では当時「ハタメダイ」と呼ばれていた。母によれば祖母も常に身に着けていたという。未だ家庭祭壇に飾ってある家もある。思わぬところで亡き法王に親近感を抱いた。続いて記念館を見学。案内はイネスさんという若い女性で、驚くと程というかたじたじとなるほど熱心に解説してくれた。ヨハネ・パウロ 2 世に対しての思いが溢れんばかりといった様子で、次第に解説の声も大きくなり、遂には係のシスターからうるさいと叱られてしまうほどであった。この女性に限らずポーランドの人は話好きで、自分の思いを伝える事に情熱的であると感じる。ところで彼女はスコセッシ監督の沈黙を見て日本が嫌いになったというのである。この映画を見て迫害に耐えて殉教していった日本人の姿ではなく、迫害する側の人間が印象に残ったというのは、我々にとってもそういう見方もあるのかとちょっと驚きであった。それでも彼女は今回私たちを案内してみて、皆が熱心に聴いてくれ優しい人たちだったので、すっかり日本人が好きになったと言ってくれたのであるが。

法王は石切り場で強制労働をさせられた事もあったが、父を亡くした 1941 年、その事をきっかけに地下組織の神学校に入学。この時代その事が発覚すれば死刑という厳しい状況だったという。1976 年法王に選ばれるが、1981 年 3 月、ヴァチカンの広場で狙撃される。あと 2 ミリずれていたら助からなかったという。狙撃の理由は 1979 年ポーランド訪問の時に発した重要なメッセージにあるという。この時使用されたピストルが床の一部に展示されていた。法王は死の床の傍らで、シスターが「列王記 10 章 35 節まで読んだところで息を引き取ったという。全世界から多くのＶＩＰが弔問に訪れたが、ロシアと中国だけは来なかったという話である。

この日はクラコフの巡礼の家に宿泊

8 月 25 日　クラコフ

16 世紀、ポーランドの首都がワルシャワに移されるまで、首都はこのクラコフの地にあったという。戦禍にもあわず由緒正しい古都の面影を今に伝えている。

① 聖ファウスティナ修道院

この聖堂の建立は第一次大戦以後との事であるが、天井の装飾等はやはりビィザンチン的。この時はちょっとだけ立ち寄り翌日見学した。

② クラコフ司教宮殿

ヨハネ・パウロ 2 世が司教時代に住んでいた場所。

③ 聖ドミニコ聖堂(三位一体のバジリカ)と修道院

19 世紀に起きた町の大火でかなりの部分焼失してしまったというが、焼け残ったところから、近年古いフレスコ画などが発見されたという。パウロ神父がドミニコ会の司祭であるところから、普段一般には公開されていない修道院の奥深くまで見学する事が出来た。内部には殉教者の絵なども飾られていたが、それはスウェーデンに攻められた時、多くを奪われた挙句、殉教者を出した出来事を描いたものという。14 世紀の会議室を見学。庭から良いバラの香りがしてきた。ドミニコ会は中世時代「異端審問」の尖兵であった事が知られているが、それをテーマにした絵もあり、その中にドミニコ会士とともに犬が描かれていたが、この犬は「見張り役」という意味との事。食堂にまで入らせてもらったが、正面の壁には 13 世紀のフレスコ画が描かれ、今日に至るまでずっと食堂として使用されてきたとの事。調味料と思しきものや、飲みかけのペットボトルなどが置かれ、修道院の生活の匂いがする場所であった。授業中の講義室も覗かせて貰ったが、教授はパウロ神父の同級生でロザリオの祈りの専門家との事。突然の闖入者に対して、教授も学生も温かな笑顔で歓迎してくれた。ドミニコ会はよく勉強し、典礼のレベルが高いとの事である。この修道会の建物は場所によっては 10 世紀の壁が顔を覗かせているところもあったが、元々この地にはロマネスクの教会が立っていたとの事。

聖堂内の聖母子像のイコンも素晴らしい。ポーランドの教会で見る聖像画はほとんどスキェンカで覆われており、ビィザンチン的である。小聖堂でこの日のミサが行われたが、この小聖堂の祭壇に聖ヒヤシントの墓が安置されている。聖ヒヤシント・オドロバスは、1183 年ポーランド生まれの聖人で貴族の出という。1221 年ローマへの旅行の途中、聖ドミニコに出会い彼から直接制服を手渡されたという。ポーランドではドミニコ会創設とほぼ同時期に、その活動がここクラコフの地でも始まったという事になる。パウロ神父の話では、昔からの習わしとして、記念日の夜には 100 人の修道士が集まって、“神の花よ”という聖ヒヤシントの歌を歌い、マリアの連祷を唱えるとの事である。聖ヒヤシントに関しては日本のキリシタン時代とかすかな繋がりがある。彼の銅版画がキリシタン時代の日本に伝わり、後に福井の医家から発見されたのである。現在上野にある東京国立博物館に所蔵されている。

パウロ神父の話

『夜と霧』の著者フランクルは能力が高かったため、すぐには収容所送りとはならず、最後の方でウィーンから送られたという。その時渡された衣服のポケットに聖書の一部が入っていて、それを読む事によって生きる希望がわいたとの事。

④ 聖マリア聖堂(ゴシック)

クラコフの中央広場に面し、1222 年に建造。15 世紀、ドイツ人ファイト・シュトースによって作られ、その名のついた開閉式のヨーロッパ最大の木彫の祭壇が見事である。1 日 1 回 11 時 50 分に開くという事で、その時間に合わせて行く。この聖堂は戦禍を免れる事が出来た為、13 世紀から 1 度も破壊されていないという。祭壇画が開かれると、期待に違わぬ素晴らしい木彫像が現れた。下から「マリアの眠り」、「被昇天」、「マリアの戴冠」、両脇にポーランドの聖人が立つ。一刀彫で彫られていて芸術的価値も高いとの事。第 2 次大戦中ナチスに略奪されたが無事に戻ったという。聖堂内にはポーランドの誇る歴史画家ヤン・マテイコ(1838～93)の天使の絵もある。天井や壁面の細かい装飾も実に美しい。教会を出ると、丁度塔の上でラッパが吹き鳴らされる時間との事で塔の上を見上げて暫し待つ。塔の一体どこで吹くのかと目を凝らすがわからない。その昔モンゴル軍がクラコフを襲った時、敵の来襲を告げる為に吹かれたが、モンゴル兵の矢が首に突き刺さり、ラッパの吹き手は亡くなったという。それを忍んで今も塔の上で吹かれるが、矢が当たった瞬間を表わすため、音が途中でパタリと止む。吹き終った吹き手が塔の上から手を振ったので、ようやくどこで吹いているかわかった。この教会は正にクラコフ市民の為の教会であるとの事。

⑤ 広場

13 世紀に整えられた広場という。広場に立つ銅像はアダム・ミツキェヴィッチ(1798～1855)というポーランドロマン主義時代の代表的な詩人。秘密結社に関わった為、祖国を追われ、異国の地で祖国の独立を願い続けたという。

⑥ 聖ヴォイチェフ教会(ロマネスク)

11 世紀建造の最も古い教会。小さな聖堂であるが、祭壇や内部の装飾は美しい。豪華絢爛たる大聖堂も素晴らしいが、今回の巡礼で、小さくとも内部が素晴らしく充実した装飾の教会を幾つも見る事が出来た。

⑦ 旧庁舎の塔

建物は 1820 年に取り壊されたが、塔だけ残されたとの事。少々傾いているという話である。

⑧ ヤギェウォ大学(コレギウム・マイウスカレッジ)

1364 年、カジミエシュ大王によってポーランドで最初に創立された大学。コペルニクスやヨハネ・パウロ 2 世がここの卒業生。中庭には 16 世紀当時の古い井戸も残っている。リトアニア系のカジミエシュはポーランドのヤトヴィガ王女と結婚、ポーランドの近代化に力を尽くした。

⑨ ヴァヴェル大聖堂

旧市街の南のはずれにある。多少旅の疲れも出て来た私たちは、乗合バスを貸し切って向かった。街の風景を眺めながら、オープンな車体に吹き込む風が心地良かった。

14 世紀から 18 世紀までポーランド王の戴冠式を行った教会であり、カジミエシュ大王ら歴代の国王の墓所があり、ポーランドの中心的な教会である。ポーランドの守護聖人スタニスワフの聖遺物も安置されている。聖マリア聖堂がクラコフ市民の為の教会としたら、この大聖堂は王の為の聖堂と言えるとの事。カジミエシュ王の妻、聖ヤドヴィカは背の高い金髪美人だったと言われている。

聖堂地下の墓所には歴代国王以外にも、ポーランドの英雄と認められた人の墓もある。1794 年に起きた蜂起の指導者であるコシチュシコや、ポーランド共和国初代国家元首ピウスツキの墓もある。2010 年「カチンの森」事件 70 周年追悼式典に向かう途中、航空機事故死したカチンスキ大統領夫妻もここに埋葬されている。この事件は未だ解決されていなというが、ロシア陰謀説もあるとの事。

⑩ ヴァヴェル城　旧王宮

16 世紀ジグムント 1 世が建造。ジグムント 2 世王が収集したと言うタピスリーが見事。まず「大蔵大臣」の部屋を見学。「授乳のマリア」の絵や跪き台などを見る。3 階の「騎士のトーナメント試合の間」、「王の軍の閲覧式の間」などを見学。コレクションのタピスリーは、フランドル産で元々300 枚あったという。現在 100 枚以上所蔵との事。

16 世紀のポーランドは大国であり、領土にボヘミアやハンガリーも含んでいた。タピスリーはその栄華の象徴でもある。「玉座の間」には「ノアの方舟」の物語の中の洪水がくるのを知らせているシーンのタピスリーが飾られていたが、金糸・銀糸。絹・ウールで織られているとの事。イニシアルがあるのは特注品の証拠との事。レパントの海戦の絵画(ベネツィア派のトーマス・ドラベラの作品)、オールド・ポーリックスタイルのサルマッキーの肖像画などもある。バロック様式の部屋は天井画が描かれ、革製の壁紙が重厚感を出している。最後の部屋には旧約聖書がテーマのタピスリーが掲げられていた。これらのタピスリーは大戦中大きな木の箱に入れられ、ナチスの眼を逃れてヨーロッパ各地を転々とした挙句、最後にカナダに送られたという。戦後すぐに返却すると、ソ連政府に取り上げられてしまうという事で 10 年以上そのままカナダに預けられ、1961 年返還されたという。

⑪ 広場に戻って、現在は土産物屋が軒を連ねる織物会館でたっぷり 2 時間買い物を楽しんだ。広場には市も立ちポーランドの伝統工芸製品が数多く売られ、見ているだけでも楽しく、広場に組まれた舞台では、賑やかに民族音楽や舞踏が披露されていて時が経つのを忘れた。木製の天使やヴオヴィチの町特産の切り絵細工のイースターエッグなどを買い求める

⑫ この日の夕食は復元されたユダヤ人街であるカジミエシュ地区のレストランで、ユダヤの民族音楽であるクレズマー音楽を聴きながらの食事となった。クレズマー音楽を生で聴くチャンスは滅多にない。14 世紀カジミエシュ大王は当時迫害されていたユダヤ人を保護した為、クラコフに多くのユダヤ人が移り住んだという。レストランの斜め向か

い側にはシナゴーグも復元されていた。この辺りは映画「シンドラーのリスト」のロケ地にもなったという。レストランの内部には、珍しいユダヤの写真・地図・絵画が壁一面に飾られていたので写真に収めた。若者たちの演奏するクレズマー音楽は気分を生き生きと高揚させ料理も美味しく、実に印象に残る一夜となった。

パウロ神父の話

ルターはユダヤ人を嫌っていた。ナチスはキリスト教を認めていなかったにもかかわらず、この事をユダヤ人撲滅に利用した。

ポーランドに於いて、戦前までのポーランド人とユダヤ人の関係が果たしてどうだったのか気になったので、神父に聞いてみたところ、ユダヤ人が嫌われた理由として次のような例を挙げられた。ポーランド人はユダヤ人の店でいつもルーズに掛けで買い物していたが、ある時法外な金額を請求されてしまい、頭に来てしまったという。そのような事が積み重なって、ユダヤ人嫌いがつのっていったのではないかとの事。ワルシャワやクラコフというポーランドの主要都市で、人口比率にかなりの割合を占めていたユダヤ人との間には、特に経済的な摩擦が見られたという事であろうか。

この夜もクラコフの巡礼者の家に連泊

8 月 26 日　クラコフ→ナジャ→ヴィエリチカ→スロヴァキアのコシツェ

① クラコフ　慈しみのセンター　聖ファウスティナ修道院の聖堂

祭壇左側に聖ファウスティナの聖遺骨が安置され、本日のミサが行われる。

パウロ神父の話

聖ファウスティナによって記されたイエス御出現の日記が、まずフランス語に翻訳されたが、それがまずい訳だった為に誤解を招いてしまった。「慈しみの特別聖年」で全世界の教会に飾られたイエスの絵も、始めは飾る事を禁止されていたという。

② 慈しみのセンターの近代建築の大聖堂

ヨハネ・パウロ 2 世がヴァチカン広場で狙撃された時着ていた血染めの法衣が展示されていた。ここも近代建築であるにもかかわらず、聖堂内に描かれた絵画はやはりビィザンチン的である。

③ 慈しみのセンターのヨハネ・パウロ 2 世センター

聖シャルベルという見た事のない聖人のポスターが貼られていたのでパウロ神父に尋ねたところ、19 世紀のレバノンの聖人でポーランドや世界各国でとても崇敬されている聖人との事。

ナジャに向かっている時、この道がチェンストホーヴァという大巡礼地に続くという事もあるのか、道路脇に十字架や聖像が、小さな家の形をした物に収められた「カプリーチカ」を度々見かけた。

④ ナジャのドミニコ会巡礼の家

ここには昼食をとる為に立ち寄ったのであるが、ポーランドとスロヴァキアの国境近くの山間部に位置し、自然に恵まれ眺めも素晴らしく、そこここに素朴な木彫の聖像や天使が飾られ、心安らぐ佇まいであった。出来れば数日ゆっくり滞在したいと思うほどであった。小さな聖堂は「聖ヒヤシント信仰の家」と呼ばれているとの事。食事もとても美味しかったが、ライ麦発酵のスープの味が忘れられない。後にガイドのバルバラさんが、全員にこのスープの素をプレゼントしてくれた。言葉は通じないけど、いつも明るく元気に私たちの旅を盛り立ててくれたが、細やかな気配りも忘れない女性だった。

この巡礼の家でも「エッチェ・ホモ」の木彫を幾つか見かけた。

ポーランドは 7 つの国境に接しているという。リトアニア・ドイツ・ベラルーシ・チェコ・スロヴァキア・ウクライナ・ロシア(飛び地)。その内スロヴァキアは山、ドイツは川、ベラルーシはバイソンの生育する原生林との事。それほどの国境の多さは、日本のような島国に育つとちょっと感覚的にわからないものがある。

途中第一次大戦の激戦地を通る。「ダルノクの戦い」というロシアとオーストリアが戦った場所との事。その為か沢山のお墓が目に付いた。

⑤ スタルィ・ソンチ　聖クララ会修道院　聖ギンガ聖堂

この町在住のボイティック氏に案内してもらう。

聖ギンガについて

聖ギンガ(1224～1292)はハンガリーの王女であるが、ポーランド王ボレスワフ 5 世に嫁ぐ。多額の持参金を持って来たが、この地域の為に使ったという。王亡き後、2 日後にクララ会修道院に入り、一般のシスターとして生涯を送った後、1292 年に 68 歳で亡くなったという。賢明な女性であり、聖歌をポーランド語で歌えるようにしたという。1999 年、ヨハネ・パウロ 2 世より列聖された。この地域は岩塩の生産でも知られている。

聖ギンガ聖堂

聖堂内に聖ギンガの部屋が保存され、聖遺物が安置されている。バロック様式の小さな聖堂であるが、内部の装飾は重厚で見事であり圧倒される。聖堂後方の奥まったところにオルガンが置かれているが、シスター方はそのオルガンの背後でミサに与る為に、一般信徒からは見えないとの事。この修道院は 13 世紀の創建、現在 32 名のシスターが在籍。19 世紀、修道院の多くが潰された時、この修道院だけは沢山の人の努力で残る事が出来た。存続の条件として女子教育の為の学校を作るように要請された。ポーランドでは長い歴史を通して多くの教会が破壊され、修道院が閉鎖や強制移住の憂き目にあったようである。

⑥ ヨハネ・パウロ 2 世博物館

聖ギンガの列聖の折り、ヨハネ・パウロ 2 世がこの地を訪れたが、50 万もの人々が集まったという。

スロヴァキアのホテルに宿泊

ポーランドの関連年表

966 年　ピャスト王朝のミェシコ 1 世がチェコ王女ﾄﾞﾌﾞﾗｳﾞｧと結婚しカトリックに改宗

1025 年　ボレスワフ 1 世がローマ法王から正式にポーランド国王として認められる

1222 年　クラコフのドミニコ会の教会が、イボ・オドロバンス司教により祝別される

1370 年　カジミエシュ 3 世は大王とたたえられ最盛期を迎えるが、彼の死によりピャスト朝断絶

1386 年　ポーランド・リトアニア連合によりヤギェウォ王朝始まる

1430 年　ヤスナグラの「黒い聖母」盗難にあい傷つけられる。

1569 年　ポーランド、リトアニア統一

1564 年　イエズス会ポーランドに進出

1573 年　ヤギェウォ王朝断絶

1587 年　スウェーデン王ヨハン 3 世の子、ジグムントが王に即位

1655 年　スウェーデンの侵攻。

1656 年　ヤン・カジミエシュ王はルブッフの聖母マリア像の前で、聖母マリアの庇護のもと、自らと自国の領土を置く事を誓った。その日“ポーランド王国女王陛下、我らの為に祈り給え”という言葉が使われ、ポーランドのマリア崇拝が定着していく。

1772 年　ロシア・プロシア・オーストリアによる、第 1 次ポーランド分割

1793 年　第 2 次ポーランド分割

1795 年　第 3 次ポーランド分割によりポーランド王国消滅、地図上から消える

1830 年　ポーランド民衆による 11 月蜂起、9 か月後敗北、ロシア帝国に併合。大量の亡命者を生む。ショパンもこの時期祖国を離れる。

1846 年　クラコフ蜂起

1863 年　1 月蜂起

1917 年　ソビエト政権成立

1918 年　第 1 次大戦終結、ポーランド独立、123 年の分割時代終わる

1939 年　9 月 1 日､ナチスがポーランドに侵攻､9 月 17 日ソ連がポーランド東部に侵攻。ポーランドは再びこの 2 国により分割される。この時のソ連との戦闘で捕虜になったポーランド軍が虐殺された事件が「カチンの森事件」である。一方ナチスはまず聖職者や教師、大学教授、弁護士、医師といったポーランド社

会における精神的・文化的指導層を逮捕、強制収容所に送るか殺害した。この時コルベ神父も逮捕される。

1940 年　1 月からユダヤ人を各地のゲットーに押しこめたが、劣悪な環境の中で 50 万人が命を落としたという。

1942 年　1 月からユダヤ人絶滅政策採用。エディト・シュタイン、アウシュヴィッツでガス死する

1943 年　ポーランド人・ウクライナ人という被占領民族同士の凄惨な殺し合いが起こる(民族浄化)。まずウクライナ農民がポーランド人集落の襲撃無差別虐殺を行なった。その犠牲者は 4～6 万人に上ったという。ポーランド人もこれに対して報復した。

1944 年　ワルシャワ蜂起、

1945 年　第二次大戦終結

1948 年　ポーランド統一労働者党結成。共産党 1 党独裁体制確立

1956 年　ポーランド司教、ヤスナグラでヤン・カジミエシュ王の誓を新たにする

1957 年　ポーランド大司教ステファン・ヴィシンスキ枢機卿巡礼の旅に出発する

1978 年　ヨハネ・パウロ 2 世誕生

1980 年　自主管理労組「連帯」結成。ワレサ委員長も黒い聖母のバッジをつける。

1981 年　ヨハネ・パウロ 2 世、ヴァチカンの広場で狙撃される。

1982 年　コルベ神父、ヨハネ・パウロ 2 世によって列聖

1984 年　ポピュエウシュコ神父惨殺される

1989 年　ポーランド統一労働者党、連帯に政権を譲る。社会主義体制崩壊

2013 年　ヨハネ・パウロ 2 世列聖される。

2)8 月 27 日　スロヴァキア、コシツェ

途中サビノという町を通ったが、この辺りには「ギリシャ・カトリック教会」という教派の教会があるとの事、ローマに帰属しながらも司祭は妻帯しているとの事である。

コシツェの旧市街　聖アルジュベタ(エリザベート)大聖堂と聖ミハエル(ミカエル)聖堂を訪ねる。コシツェはスロヴァキア第 2 の都市。ポーランドとハンガリーの通商路上にあり、通商・工業で栄えた。この町を案内してくれたのは若い男性のガイドだった。

① 聖ミハエル聖堂　1350 年～1370 年に建造。

聖アルジュベタ大聖堂のすぐ傍らに佇む小さな教会。聖堂内の壁には薄らとフレスコ画が残っていた。

パウロ神父の話

スロヴァキアは一時ハンガリーに組み込まれていた為、ハンガリーの地名が残っている。そのハンガリーと共にカルヴァン派の教会が入ってきた(市内を散策中、尖が

った屋根のてっぺんに十字架でなく風見鶏が乗っている建物を見かけたが、それがカルヴァン派の教会との事)。宗教戦争はアウグスチヌスの解釈の違いによるもの。
スロヴァキアは世界各国の車のエンジンを生産している。40 年前のチェコスロヴァキアは、教会が非常に圧迫されていた。宗教に関する本が出版出来ないような状況だった。パウロ神父はスキーに来たように見せかけて、この地で午後になると密かにミサを行っていたという。

② 聖アルジュベタ(エリザベート)大聖堂 1378 年～1506 年に建造

ゴチック様式　スロヴァキア最大の教会　この教会が建つ前はロマネスクの教会が建っていた。13 世紀モンゴルの侵入により破壊された時はドイツから流れて来た人たちが、再建の為に力を尽くしてくれたという。聖アルジュベタは 1207 年ハンガリーの王女として生まれる。貧しい人、特にハンセン病者の為に尽くした。夫の死後義弟により城を追われたが、フランシスコ会の第 3 会員となり、変わらず困っている人々の為に働き、1231 年 24 歳で亡くなった。祭壇はスロヴァキアで最も古いものであり、待降節と四旬節の年に 2 回閉じられるとの事。この聖堂内の聖遺物をルターが非難したという。

③ ウルバンの塔と鐘

聖アルジュベタ聖堂の鐘楼であるが、1556 年の町の火災で鐘が壊れたという。当時鐘の音は 13 キロ四方まで響き渡っていたという。現在バラバラになった鐘ははぎ合わされて、塔の傍らに置かれている。

④ 公園　紋章の碑

王様が変わる度に紋章が変わったという。コシツェは 907 年から 1000 年間ハンガリーに服属。13 世紀にはモンゴルに侵略されている。5 つの塔があり、昔は城壁に囲まれていた。

⑤ 国立劇場

ヴェルディのオペラ「ナブッコ」を上演中だった。

⑥ ペストの記念碑　18 世紀

無原罪の聖マリアと天使の碑であるが、共産主義の時代天使は全て外されていたとの事。コシツェの街は共産主義時代の建物が残っている事とロマが多いのが問題との事。この町は廃屋が目立つような気がしたが、バレリーナの幽霊が出るとの噂で、誰も住み着かないという建物があった。この日が日曜日の為、土産物店が閉まっていたのが残念だった。スロヴァキアの素朴な民芸玩具も見たかったが。この地でも道路脇のカプリーチカが目についた。ポーランドはどこまで走っても自然溢れる美しい景色が続くが、スロヴァキアに入ると工場も目についた。車窓から見える教会はポーランドがビィザンチン風の玉葱型の屋根が多かったのに比べ、三角屋根の普通の形の教会が多いように思われた。ただ集落ごとの教会の数はスロヴァキアの方が多いと感じ

たが人口密度の違いもあるのかも知れない。

スロヴァキアの関連年表

828 年　スロヴァキアで最初の教会が、西スロヴァキア、ニトラ公国に建てられる。
833 年　大モラヴィア王国成立
907 年　大モラヴィア王国滅亡、スロヴァキアはハンガリーの属国となる。
13 世紀　モンゴル襲来
1526 年　ハンガリー王国にオスマン帝国襲来
1541 年　ブダがオスマン帝国に占領され、以降 150 年にわたりハンガリー領は現在のスロヴァキア地域のみとなる。
18 世紀末　民族復興運動起こる。
1867 年　オーストリア=ハンガリー二重帝国発足
1918 年　第一次世界大戦に二重帝国敗れ、マサリクがスロヴァキアの独立を宣言
1939 年　チェコもスロヴァキアもナチスドイツに支配される
1945 年　第二次大戦終結　チェコスロヴァキア独立
1948 年　共産党が政権をとる。
1968 年　「プラハの春」事件
1977 年　知識人の地下組織「憲章 77」が人権抑圧に対する運動を展開
1989 年　チェコとの分権独立運動が高まる。
1993 年　チェコスロヴァキア解体

3)ハンガリー、ブダペスト着　この日からビジネスホテルに 3 連泊となる。
8 月 28 日　ハンガリー、　ブダペスト
　ブダペスト出身の女性ガイドエリナさんの案内による。
エリナさん、「ハンガリーは人口 1000 万、1920 年まで領土はもっと広かったが、クロアチア・ルーマニア・トランシルバニアが奪われてしまい、狭くなってしまった。特にトランシルバニアはハンガリーの宝石箱だったのに」と残念そうに語り、かなり愛国心が強そうな女性という印象を受けた。彼女は日本を訪ねた時、広場も銅像もない事に驚き、国会議事堂を見た時には悲しくなったとの事。どうやら日本の国会議事堂は貧弱だと感じたらしい。確かにその後案内された国会議事堂は壮麗で立派であり、広場は堂々たるものであった。この日は一日ブダペスト市内を回る予定になっており、丁度プーチン来日との事で交通規制を心配したがそれほどの影響はなかった。
　ブダペストはペスト(ペシュトが正しいらしい)とブダに分かれているが、ペストは平原でブダは山との事。バスはペスト側を走る。これまでの国とは建築様式が違うと感じた。100 年前後経った建築物が多いが、共産党時代、あまり建物の修理をしていないとの事。ブダ

ペストのブダは王の息子の名前との事。車窓より堂々とした中国銀行の建物が目に付いた。バスがアンダラシー通りを通った時、丁度刑務所の前を通過したが、この場所は共産主義時代がどんなに酷かったかを知るのに良い場所との事。エリナさんの父親もこの刑務所に投獄されたという。彼女の話の端々に当時の政権に対する嫌悪感がにじみ出るが、無理からぬ事と思われる。

バスはコダーイ記念館の横も通った。ハンガリーは近代にコダーイやリスト、バルトークといった名だたる作曲家を輩出している。

① 英雄広場

ハンガリーが出来て 1000 年記念の 1896 年に作られた。宏大な広場に大天使ガブリエルが立つ 36mの塔があり、ハンガリー人の祖となったマジャール族の 7 人の部族長が勇壮な騎馬姿でその台座を取り巻いている。その両側を扇形にイシュトバーン 1 世ら歴代の王や政治家、芸術家の銅像がずらりと並ぶさまは確かに圧巻である。マジャール人はフィン・ウゴル語族に属しロシアのウラル山脈の南部に広がる平原に住んでいた民族と言われている。ウラル山脈の東の方にも進出していた為、「アジア系」人種とも言われるようである。

イシュトバーン 1 世は建国の父と言われ、初代ハンガリー国王。銅像は 2 重十字架を手にしているが、これは国と宗教の一致を表わすとの事。賢く宗教的にも深い人で、彼の作た憲法・法律、それに宗教に関する決め事は、未だに正しいと言われている。この王のおかげで今でもマジャール人が生きているとの事。1038 年 8 月 15 日にイシュトバーン 1 世は亡くなるが、彼はこの被昇天の聖母の祝い日に亡くなる事を願っていたという。跡継ぎの息子アメリクを 24 歳で亡くした彼は、亡くなる時「マリア様、私の国を差し上げますので守って下さい」と祈ったという。この時以来、ハンガリーは聖母マリアを大切にするようになったと言われている。広場の横の建物は美術館で、1906 年頃建造。共産主義時代、所蔵絵画の多くを旧ソ連に奪われてしまったが、現在ゴヤの収集で有名との事。

再びバスに乗りハンガリー市街を眺めながら、イシュトバーン大聖堂に向かう。かのハプスブルク皇妃エリザベートも通ったという 1894 年建造のレストランの前を通る。ハンガリー人はハプスブルク家には反発しても、ハンガリーをこよなく愛し、よく訪れていたエリザベートには親しみを持ち“シシィ”の愛称で呼んでいたのは知られた話であるが、ガイドさんも「シシィが」とまるで自分の身内でもあるかのように話していた。動物園やサーカス、名高い温泉などを眺めながらバスは進む。大通りに面し、1 軒 1 軒が美しい佇まいを見せる旧邸宅群は、共産主義政権時代になってそれまでの住人が追い出され政府に奪われてしまったという。2 時間で出て行くように強制された例もあったという。パウロ神父もそうであるが、エリナさんも共産主義政権に対しての恨みは、今も消えないようである。坂本陽明氏が『東欧・中東とキリスト教』(聖母の騎士社　1998 年)という著書の中で、東欧諸国はブルガリア以外全てソ連に対し嫌悪感を持ち、ロシア語を使うことを嫌うと述べている。リストアカデミーミュージックや、かのシシィも訪れ、世界で 5 番目に響きが良

いというオペラ座の前を通り過ぎてイシュトバーン大聖堂に着く。

② イシュトバーン大聖堂

建設は 1851 年に始まり 1905 年完成。イシュトバーン 1 世は 1083 年に列聖された。 堂内には貧しい人の為に尽くした聖エリザベートの像が置かれているが、なんといっても重要なものは、イシュトバーン 1 世のミイラ化した右手首の聖遺物である。聖堂奥に聖遺物箱に入れられ安置されているが、傍らに置かれた箱にお金を入れると明かりがつくしかけになっていて、握った拳の指 1 本 1 本までよく見えた。この聖遺物の安置された聖堂は現在大聖堂と繋がっているが、元々大聖堂建立より前の 1898 年に出来た建物との事。共産主義政権時代、イシュトバーン 1 世の記念日は本来聖母の被昇天の 8 月 15 日であるにもかかわらず、故意に 8 月 20 日に変更されてしまったとの事。共産主義政権にとって、マリア崇敬がどれだけ厄介なものであったかの証拠と言える逸話である。

③ ドナウ川沿いの靴

国会議事堂に向かう途中、ドナウ川の川べりに靴が並べられているのが一瞬目に入った。1944 年、ユダヤ人がその場所で後ろから撃たれ、そのまま川に捨てられたという。思わずアウシュヴィツで見た夥しい古靴の山を思い出したが、当時靴は貴重だった為その場で脱がされたのだという。その出来事を痛んで鉄製の靴のモニュメントとして 60 足ほど置かれているとの事。中には子供の靴もあるという。この時と後もう 1 回バスの中から見ることが出来た。やはり一瞬だったが、目というより、心に焼きつく光景だった。

ハンガリーに於いては他のヨーロッパ諸国に比べてユダヤ人に対する迫害はゆるかったといわれ、時代によってはユダヤ教徒の移住が促進されたり、立場が保護されたりした時期があったようである。宗教政策が寛容なオスマン帝国支配下の時代には、バルカン半島からスペイン系ユダヤ人セファルディームも入ってきたという。19 世紀後半にはハンガリーのユダヤ人は全人口の 4%に達していたという。1867 年法律によりユダヤ教徒の完全な「解放」が実現され、キリスト教徒と平等の市民権が与えられた。1895 年には「公認の宗教の 1 つとして認定された為、さらにユダヤ教徒は増加し続けたという。1900 年には首都ブダペストのユダヤ人の人口は全体の 21・5%に達していた。1854 年から 1859 年にかけて経済力をつけたユダヤ人により大シナゴーグが建てられ、その後も建設が続いた。19 世紀のシオニズム運動の指導者テオドル・ヘルツェルもこのハンガリーの生まれである。

ユダヤ人の迫害がこのハンガリーでも顕著になって行くのは、第一次大戦後という。ナチスの迫害時代、時の政権によりなんとかユダヤ人の強制収容所送りは免れていたが、1944 年 10 月にファシスト「矢十字党」が政権を握ったため、ハンガリーのユダヤ人もゲットーに隔離され虐待を受け、強制収容所送りとなったという。この時ハンガリー全体に布かれた恐怖政治のため、バルトークも亡命したという(以上『図説ハンガリーの歴史』南塚信吾著　河出書房新社　2012 年)

パウロ神父の話では、スウェーデンでは政府がユダヤ人をデンマークに移動させて、強

制収容所送りを免れさせたのだという。

④ 国会議事堂(ハンガリーの王冠を所蔵・展示)

ガイドさんが自慢するだけあって外観はまるで王宮を思わせるように立派であるが、内部の装飾が繊細かつ華麗で美しい。49 キロの金を金箔として使ったという。1885 年着工、17 年の歳月をかけて 1902 年に完成。国会議事堂として世界で 3 番目に大きいとの事。王冠は初代イシュトバーンから最後の王カーロイ(カール)4 世が 1948 年に退位するまで、950 年に亘って王から王へ受け継がれて来たもの。第 2 次世界大戦後、国外に持ち出されアメリカで保管されていたが 1978 年返還されたという。ロシア軍が何度も持ち去ろうとしたという話もある。写真撮影は禁止、王冠の左右には屈強な警護の人間がついていた。ガイドさんの話では 1850 年から 1910 年頃までが、ハンガリーの最も豊かな時代との事。地下鉄も大陸で 1 番最初に出来たという。エッフェル塔を作ったエッフェルの手掛けた建物も幾つかあるという。確かにこの国会議事堂も含めてドナウ川両岸に並び立つ建築物、それに川にかかる橋の眺めは絵のように素晴らしい。

⑤ マリア教会

1992 年に建立されたという小さな教会でこの日のミサが行われる。聖堂正面入り口の壁には「聖母マリアの 7 つの悲しみ」のレリーフが飾られていた。シスターの案内によると、この教会は当時井戸があるだけの葡萄畑だったが、ある時山から馬に乗って降りてきた子供が、この井戸にふり落されてしまった。子供が帰らないのを心配した親が探しに来てみると、井戸の中に無事でいるのを見つけた。子供の話によると、井戸の中で助けを待ってじっとしていたら、素晴らしいマントの女性が現れたという。親はそのお礼としてこの小さなチャペルを建てたという。当時神父は強制労働に駆り出されたりしたが、何とかこの土地を国から買い取る事が出来たという。

ささやかな奇蹟譚とも言えるが、1891 年のソ連邦崩壊後、このように少しずつ新しい教会が建てられていったのかもしれない。小さな木造の教会であるが、聖堂内には沢山の聖画や聖像が飾られており、その中にコルベ神父の聖画もあった。親しみ深く、心がほっと安らぐような教会であった。聖画や聖像画は古い物も新しい物もあり、色々なところから集まって来たものではないかと感じられた。

⑥ ミンゼンティ・ヨージェフ枢機卿(1892～1975)記念館

共産党が政権を握っていた時代、カトリック教会を守る為に多くの聖職者が戦ったと言われるが、其の中で先にポーランドの聖ヴィジェンスキ枢機卿や聖ポピュエウシュコ神父の働きを見て来た。ここハンガリーではミンゼンティ・ヨージェフ枢機卿の名が特に知られているという。1948 年春から政府がカトリックの学校を国家管理の元においた事に激しく反対していた枢機卿は、12 月に逮捕され 2000 日余り拘束され、これをきっかけにカトリック教会の活動が制約されることになったという。その後枢機卿は 15 年間アメリカ大使館に保護されている。記念館の中には枢機卿が刑務所に拘禁されてい

た間に作ったという、小さなナットに紐を通して作ったロザリオや、親指の先程の金属製の葡萄酒入れ(食事で葡萄が出たら、1粒からでも葡萄酒を作ったという)や祭服や帽子、それに母親と1度だけ再会出来た時の写真などが展示されていた。彼は共産主義者がただの1人でもいる限りは母国に戻らないと語っていたという。先にあげた『東欧・中東とキリスト教』によれば、クロアチアにも共産主義に対して一貫して反対の姿勢を取り続けた大司教ステピナックという人物がいたという。

⑦ 漁夫の砦

残念ながらマーチャーシュ教会は閉じていたが、ここからのドナウ川とペスト地区の眺めは素晴らしかった。この広場のアンティークショップで、記念に掌大の聖母子のイコンを求めた。小さいながらもスキェンカで覆われている。

⑧ ハンガリー料理のレストランの夕食

ロマの演奏や民族舞踏を見ながら美味しい食事を頂いた。私たち一行は、2人の神父を始めとして次々に舞台に引っ張り出され、一緒に歌いかつ踊り大いに盛り上がって楽しい一夜を過ごした。

ハンガリーにロマが現れ始めたのは、14世紀の頃からと言われている。ユダヤ人の場合もそうであったが、ハンガリーはロマも受け入れ保護したという。所謂ジプシー(ロマ)楽団が出来るのは18世紀の頃からという。第2次大戦末期彼らもナチスの犠牲となった(前出『図説ハンガリーの歴史』

8月29日エステルゴム→センテンドレ

エステルゴムへ向かう。エステルゴムは宗教の首都であり、聖イシュトバーン1世が生まれ、1000年に戴冠式を行った場所でもある。途中シュワービッシュ村を通る。19世紀の色分けされた「ハンガリー王国の民族分布地図」(『図説ハンガリーの歴史』参考)を見ると、数カ所にわたってドイツ人地区が点在している。この村の辺りもドイツ系の言葉を守っているという。ハンガリーは正に多民族国家である。

エステルゴムに到着する。この地には鈴木自動車が進出しているという。

① 大聖堂

ハンガリーカトリックの総本山。現在の聖堂はオスマン帝国の侵入によって破壊された後、1822年から50年をかけて再建。「聖母マリアの被昇天」の祭壇画が有名。この聖堂では共産主義政権の時代でもミサを挙げることが出来たという。堂内には自分が亡くなった後、聖母マリアに国を頼むイシュトバーン1世を描いた絵画や、マリアテレジアからの贈り物の箱、などがある。この大聖堂の中の小聖堂で今回の巡礼最後のミサが行われた。地下のクリプタには歴代の大司教が総て埋葬され、ミンゼンティ枢機卿も埋葬されている。ヨハネ・パウロ2世もここを訪れたという。

② 昼食

昼食はイシェグラムというセンテンドレ近郊の町でとった。”大きな雷“というユニ

ークな名前のレストランで雰囲気も良く料理も美味しかったが、この店からの眺めが素晴らしく、前方に古城も見えた。

センテンドレの街に向かう。センテンドレは芸術家の町であり、セルビア正教の町だという。ブタペストからは北へ約 19 キロの距離。14 世紀に商業都市として栄える。小さな町にセルビア正教会、ロシア正教会、カトリック教会の 3 つの教派の教会がある。

① ロシア正教会

小さいがかなり古そうであるものの、いつ頃建てられたものかわからないという。

② セルビア教会と博物館

1699 年のオスマン・トルコのハンガリー撤退により、戦乱を逃れて多くのセルビア人がハンガリーに移り住んで来たという。それはセルビア人自身が「大移動」と呼ぶほどの状況だったようである。大主教はセンテンドレに住み、主教がブダのタバーンに住んだという。この教会を訪ねた時、立派な博物館まで併設しているので、この小さな町の教会に何故博物館までと少々不思議に感じたが、ハンガリーのセルビア正教にとって、この地が重要な場所だった事が後にわかった。ガイドブックによれば、市内は他にもブラゴヴェシュテンスカ教会という由緒ある教会があるとの事。本来この地に 7 つのセルビア正教会があったが、現在使われているのは、2 つだけとの事。私たちが訪れた教会とブラゴヴェンシュテンスカ教会の 2 つということだろう。博物館の中には数々のイコン、祭服、宗教用具が展示されていた。中に装飾的なアラビア文字のものがあったが、パウロ神父によれば、オスマン帝国から下された許可証との事。それにつけてもこれほど一挙にイコン、それもセルビア正教会のものを見る機会は今後もないと思われ、貴重な体験が出来てよかった。ただ残念だったのは、ハンガリーの通貨フォリントの持ち合わせがほとんどなく、図録その他が買えなかったことである。博物館の人から教会の扉の鍵を開けて貰ったがイコノスタシス(イコンがはめこまれた仕切り壁)が大変豪華で目を奪われた。

③ この町の土産物屋で最後のショッピングを楽しむ。色々な種類のイースターエッグを売っていたが、彩色がきれいで、ついつい買ってしまう。帰りのトランクの中は各地で買い求めたイースターエッグだらけという状態になってしまった。

④ ブタペストに戻り、最後の夜はドナウ川クルージングでのディナーとなった。船上から眺める、ライトアップされたブタペストの町の光り輝く夜景は、目にも心にも染み入るほど美しかった。この夜、パウロ神父、プラヴィン神父の 2 人を始め、ガイドのバルバラさん。みほこさん、それにいつもさりげなく気遣ってくれたバスの運転手さん、そして巡礼参加者全員揃って、巡礼が無事終わりを迎えようとしている事に感謝しつつ、最後の夜を和気あいあいと楽しく過ごした。

ハンガリー巡礼関連年表

800 年代　マジャール人、ロシアのウラル山脈の南部より移動してハンガリーに定着

900 年代　アールパード朝、キリスト教を受け入れる。

1000 年　イシュトバーン 1 世、ローマ法王から王冠をいただき、ハンガリー国王となる。当時の領域は、スロヴァキア、ルーマニアやクロアチアの 1 部を含む

1240 年代　モンゴルの侵略を受け、多くの都市が破壊される

1308 年　アールパード王朝断絶後、ナポリのアンジュー家のカロベルトが王位を引き継ぐ

1370 年　ハンガリー王ラヨシュ 1 世、ポーランド王位継承。最大版図となる

1526 年　ラヨシュ 2 世(ポーランド出身)の時代、オスマン帝国が侵略。ハプスブルク家がボヘミア・ハンガリーの統治を開始

1541 年　ブダがオスマン帝国の支配下に入り、オスマン帝国のシュレイマン 1 世はハンガリーの中心部を含む多くの地域を直轄領とし、トランシルバニアを保護下の公国とした。ハプスブルク家のフェルディナンド 1 世が支配出来たのは北部と西部の 1 部のみとなる。以来ハンガリー王国の 3 分割は 150 年続く

1683 年　オスマン帝国、ハプスブルク家のウィーンを攻めるが敗退。

1686 年　ブダをオスマン軍から奪還

1699 年　オスマン帝国、ハンガリーから撤退。ハンガリーは以後長くハプスブルク家の支配となる

1722 年　ハプスブルク家の王位継承が認められ、ハンガリーは自身の王国を維持したままハプスブルク家に統治される事になる。

1740 年　マリア・テレジアハンガリー女王となる。以後啓蒙専制政治を行う

1780 年　ヨーゼフ 2 世、王位継承。ハプスブルク家の支配に対する抵抗運動も起きていく

1848 年　コッシュート・ラヨシュらによるハンガリー革命

1866 年　フランツ・ヨーゼフ 1 世はハンガリー国会を承認。オーストリアとハンガリーの二重帝国成立。ヨーゼフ 1 世はオーストリアで「皇帝」と呼ばれ、ハンガリーでは「国王」と呼ばれる事になる

1880 年　ハンガリー全労働者党結成

1895 年　カトリック人民党結成

1896 年　地下鉄開通

1898 年　ヨーゼフ 1 世の妻エリザベート、旅先のスイスで暗殺される

1914 年　皇位継承者で、甥のフランツ・フェルディナント大公夫妻暗殺(サラエヴォ事件)、これをきっかけにオーストリア＝ハンガリー帝国はセルビアに宣戦布

告、第１次大戦へと発展していく

1918 年　戦争の敗北とともにオーストリア＝ハンガリー帝国崩壊し、ハンガリー民主共和国独立。ハンガリー共産党結成

1920 年　ハンガリー王国成立(チェコ、スロヴァキア、ルーマニアなどが割譲され、国の領域は現在のものとなる)

1939 年　第 2 次大戦勃発、日独伊の３国同盟に加担

1944 年　ドイツによる占領、ナチス寄りの「矢十字党」により恐怖政治行われ、ユダヤ人が強制収容所に送られる。

1945 年　第 2 大戦終結。ハンガリーはソ連により解放される。

1946 年　王政廃止　ハンガリー共和国誕生

1947 年　欧州復興の為のマーシャル・プランが打ち出され西欧諸国の組織化が始まると、ソ連の対東欧政策硬化、冷戦始まる。

1948 年　12 月、ミンゼンティ・ヨージェフ枢機卿逮捕

1949 年　ソ連に支配されたスターリン型の社会主義国家「ハンガリー人民共和国」となる

1953 年　ナジ・イムレ首相に就任「新路線」政策を発表するも、2 年後失脚

1956 年　ハンガリー動乱勃発、ソ連が軍事介入、多くの死亡者と亡命者を出した。ソ連に支援されたカーダール体制となり、1988 年までこの政権が続く

1958 年　ナジ・イムレ処刑(1989 年復権)

1988 年　カーダール退陣

1989 年　オーストリア国境との有刺鉄線取り除かれる。国名が「ハンガリー共和国」に変更される「ハンガリー共和国」は人民主権の国家であると宣言し、共産党の指導体制を廃止して、複数政党制をしき国民の基本的人権を強調

1991 年　ソ連崩壊。ユーゴスラヴィア解体始まる

1999 年　ＮＡＴＯへの加盟

2004 年　ＥＵに加盟

2012 年　国名を「ハンガリー共和国」から「ハンガリー」に変更

まとめとして

10 日間にわたる東欧 3 カ国の巡礼を終えて、憧れながらも遠くから眺めていた国を実際訪れてみて、それらの国々の美しさ素晴らしさは全く期待を裏切らず、より身近になり親しみが深まった。しかし一方これらの国について、更には東欧世界全体について、あまりに無知で理解不足であったという思いが強く湧いてきた。感動的な巡礼でもあっただけに、この体験を一度整理しなくては頭の中も心の中も収支が付かない状態でもあった。この巡

礼記を纏めるにあたり、せめて今回訪れたところに関してだけでも、資料等で確認するようにして、少しでも知識不足を補いたいと考えた。

ポーランド、スロヴァキア、ハンガリーの 3 カ国は、いずれも現在カトリック国であるが、それぞれ 9 世紀から 10 世紀という同じような時期にキリスト教を受容している。ビィザンチン世界と隣接している為にその影響が強く、それは聖堂を飾るイコンや壁面の装飾にも見られ、特にポーランドは玉葱型をした屋根の教会が多く、西洋世界と一味違う味わい深さでもあった。しかし何と言っても印象深いのは聖母マリアへの崇敬の念の強さであり、それはそれぞれの国の歴史とも深く繋がっている事が少しは理解出来た。先日、日経の文化欄に池澤夏樹氏の「国が壊れるということ」というタイトルの文が掲載されたが、その中で「日本のような安定した国に生まれると、国家が崩壊するという事態がなかなか理解出来ない。なにしろここは歴史が始まってから 1945 年まで一度として異民族の支配下に入ったことがないという、世界史にも希有な幸運な国なのだ。嘘だと思ったら他の例を探してみていただきたい。歴史とは民族同士の侵略と征服の記録である」とあったが、今回訪れた 3 カ国の歴史を考えると、正にその通りだといえる。日本が「幸運」で有り得たのは、なんと言っても四方を海に囲まれた島国だからである。ポーランドは 7 つの国と境を接し、スロヴァキアは 5 つの国、ハンガリーも 7 つの国と接しており、その歴史は「民族同士の侵略と征服の記録」を紡いで来たものと言えるだろう。ポーランドは事実上 2 度地図から姿を消し、スロヴァキアは建国からほんの 1 世紀ほどでハンガリーの支配下に入り、それは 1000 年もの長きに亘って続く。ハンガリーは大国であった時代もあるが、モンゴルに侵略され、オスマン帝国に支配され、オスマン帝国撤退後はハプスブルク家の傘下となる。時代が下って第二次大戦中、ポーランド、スロヴァキアはナチスに蹂躙され、戦後は 3 カ国ともソ連の支配により東欧共産圏の国として組み込まれ、カトリック国でありながら、ほとんど信仰の自由を失う。現在各地を巡れば大聖堂の壮麗さにひたすら圧倒され、小さな聖堂も印象深く、美しい聖母マリアの聖画を幾つも目にし、抑圧の時代が嘘のようである。今回 3 カ国が信仰の自由を取り戻すまでの苦難の歴史を、ポーランドのヴィシェンスキ枢機卿、ポピュエウシュコ神父、ハンガリーのミンゼンティ枢機卿の活動と生き方を通して知り、実際その時代を経験したパウロ神父の話を聞く事により、少しは理解する事が出来たような気がする。そしてその事によりヨハネ・パウロ 2 世法王が、あの時代に東欧から生まれたことの意味も改めて考えさせられた。ヴァチカンの私室にはいつもチェンストホーヴァの「黒い聖母」が飾られていたという。聖母マリアへの崇敬はある時代から国家をあげてのものとなった事も知った。国も人も苦難の時、まず聖母マリアに願い、その取次によって主なる神に祈るという、深い信仰心により乗り越えてきたと思われる。人類史上最悪の出来事の 1 つと言ってよい、ナチスのユダヤ人迫害の現場アウシュヴィッツ強制収容所を訪れた経験は生涯記憶に残ると思う。そこはコルベ神父やシスター・エディト・シュタインが尊い命を捧げた場所でもあった。このようにそれぞれの国の重い

歴史を知り、受け止める旅でもあったが、一方それらの国々の文化の豊かさ、風景の美しさ、美味しい食事も十分味わい楽しむ事も出来た。それはやはり企画し現地を案内して下さった、パウロ・ヤノチンスキ神父のおかげである。神父の深い信仰と豊かな学識が、深く心に残る巡礼を体験させて下さったのだと心から感謝する次第である。

参考文献

① 『101 のマドンナ　ポーランドイコン巡礼』塚原琢哉著　毎日新聞社　1999 年
② 『ポーランド学を学ぶ人のために』渡辺克義編　世界思想社　2007 年
③ 『東欧・中東とキリスト教』坂本陽明著　聖母の騎士社　1998 年
④ 『エヴァの時代　アウシュヴィッツを生きた少女』エヴァ・シュロッス著　吉田寿美訳　新宿書房　1991 年
⑤ 『死の国の音楽隊　アウシュヴィッツの奇跡』シモン・ラックス、ルネ・クーディー共著　大久保喬樹訳　音楽の友社　1994 年
⑥ 『エディト・シュタイン　愛のために』鈴木宣明著　聖母の騎士社　1998 年
⑦ 『身代わりの愛』小崎登明著　聖母の騎士社　1994 年
⑧ 『地球の歩き方　チェコ　ポーランド　スロヴァキア』、『地球の歩き方　ハンガリー』ダイヤモンド社、ダイヤモンド・ビッグ社
⑨ 『図説　ハンガリーの歴史』南塚信吾著　河出書房新社　2012 年

平成 29 年 9 月 20 日